

「神の福音を語りました」

1. はじめに

・テサロニケでのパウロの働きの概略

- ・パウロはクリスチャンユダヤ主義者とか偽教師の問題を手紙に書いていますが、テサロニケでは福音宣教と迫害です。どんな迫害だったかは使徒 17 : 1 ~ 9 に書いてあります。パウロは迫害の為弟子たちの配慮によって宣教を中断し、次のベレアに行かざるをえませんでした。そうした中、信者の様子を見るために、テモテをテサロニケに送りました。帰ったテモテから、テサロニケの人たちは迫害の中にあっても、硬く信仰を守り続けている報告を受けました。

そういった事情からテサロニケの人たちに信仰の励ましと慰めを与えるために書かれました。

- ・パウロのもう一つの側面は労働者（職人）であった。

47年から63年まで福音宣教のため職人として自分の生活を支えた。

2. 本文

1 ~ 6 節 迫害と福音

- ・ピリピでの宣教と迫害（使徒 16 : 12 ~ 40）—偶像の神で生計を立てていた人たちによって
- ・テサロニケでの宣教と迫害（使徒 17 : 1 ~ 9）—ねたみにかられたユダヤ人によって

・2 節の福音について

- ・「キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、『私があなたがたに伝えているこのイエスこそキリストなのです。』と言った。」使徒 17 : 3 節
- ・現代の教会ではどのようなことが強調されているか。

1. 罪の赦しを受けるようにという知らせ

2. その活動を指すこと

\*教会はこれまで一般に、福音の中心的メッセージは個人的な喜びを約束するものであって、それはほとんどなんの犠牲も払うこともなく自由に受けることができると考えてきた。

(教会イエスの共同体 P117)

- ・聖書はどのように言っているか

・「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」マタイ 4 : 17

・誘惑から山上の説教（マタイ 4 章、5 章）への文脈で

・誘惑—政治的・経済的メシアへの誘惑（マタイ 4 : 1 ~ 11）の拒否

山上の説教—新生、新しい生き方、新しい価値観—苦難の僕（イザヤ 42 : 1）

\*福音について言ってきたことは、すべてが福音ですが、「このイエスこそキリストなのです。」の言葉こそ福音を表しています。福音とはイエス・キリストなのです。

従って、悔い改めて、自分の十字架を負い、イエスに従う。

犠牲が3つあります。悔い改めという準備、十字架を負う、イエスに従う。

## 7～9節

### ・パウロの宣教と職業

- ・7節 母がその子を育てるように

- ・9節 あなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら

\*使徒18：3に「彼らの職業は天幕作りであった。」とあります。当時の徒弟契約をみると、

「日の出から日の入りまで」という時間帯でなっていたが、パウロが夜明け前から日没後まで働いたというのは、彼の勤勉さのしるしであり、模範としての意味もある。

\*使徒20：32～35「このように労苦して弱いものを助けなければならないこと、また主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示してきたのです。」

\*ヨハネ2：13～17「私の父の家を商売の家としてはならない。」16節

## 13～16節

- ・13節 人間の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れてくれたからです

- ・テサロニケの兄弟、姉妹の信仰の励ましと慰め

## 3. 終わりに

- ・宣教と倫理（この場合は職業）の密接な関係

・旧約聖書の世界では、ユダヤ人の倫理（社会・個人）は当然のこと律法に根拠を持っていた。従って、信仰と律法は時として同じモノになる。キリスト教倫理もこのことと同じように、イエスの教えと生涯に根拠を持つ。

・パウロは働いて自分の生活を支えることについて使徒20：32～35の中で2つをあげて説明した。

- ・このように労苦して弱いものを助けねばならない事。（律法）

- ・「受けるよりも与えるほうが幸いである。」というイエスのみことば